

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第211回例会

日時 昭和52年5月19日(木) 午後1時20分より

場所 東京女子医科大学本部講堂

1. 走査電子顕微鏡によるニワトリ小腸粘膜の発達にともなう変化について

(第一解剖) 野田 節子

ニワトリ胚の発生に伴って生ずる十二指腸絨毛の形態的变化の走査電子顕微鏡の観察に関しては、1972年に grey による絨毛レベルの報告があるが、今回演者は十二指腸と空腸についてそれを追試するとともに、さらに吸収上皮細胞と杯細胞レベルの観察を行なつたので報告する。材料は、ニワトリの10, 15, 17, 20日胚と、孵化後2日のヒナを用いた。その結果、十二指腸と空腸は、ともに下記のような発達段階を示した。10日胚においては、すでに pre villous ridges が隆起しており、その尾根の部分は不規則ではあるが zigzag folding がはじまっている。15日胚においては、ridges の数は増加し、規則的な周期をもつた zigzag folding をなして配列している。17日胚においては、ridges の尾根にあたる部分に将来絨毛になるための細胞集団が観察される。また、今までの ridges とは別に、隣接して新しい隆起がみられた。20日胚では ridges の根本の部分の増大と絨毛の伸張がみられ、孵化後2日ヒナでは更に著しい絨毛の発達が観察される。次に絨毛の先端に近い部分を構成する吸収上皮細胞と微絨毛レベルの比較を行なつたが、17~20日胚に比して、孵化後2日目の先端部のそれは著しい発達を示し、上皮細胞の高さにして2倍以上、微絨毛の丈にして2~3倍以上の数値を示した。さらに孵化後2日目の絨毛の深部、中間部、先端部分で同様の比較を行なつたところ、絨毛深部の細胞の高さと、微絨毛の丈は、17~20日胚の先端部分とはほぼ同じ値を示し、中間部、先端部分との間に著しい差があつた。また絨毛を構成するもう1つの杯細胞に関しては、10日胚ですでにそれらしき細胞をみとめうる。杯細胞についても、各々の胚において、また、20日胚と孵化後2日ヒナの絨毛では深部、中

間部、先端部分において、それぞれ特徴ある走査電顕像が観察された。

2. Chlorpromazine 投与ラットにみられる血糖および血中変動に及ぼす甲状腺ホルモンの影響

(薬理) 野本 照子・○永井 昇

常温下、ラットに chlorpromazine (CPZ) を投与すると、低体温がみられるが、それとともに高血糖を来すことが知られている。甲状腺摘除ラットでは、CPZ による体温変動作用が強化されることから、血中生化学的变化との関連性を明らかにする目的で、甲状腺摘除ならびに抗甲状腺剤投与ラットを用いて、CPZ 投与後体温変動、血糖および血清 Ca の動態を検討した。方法：成熟雄ラット、体重 200g 前後のものを使用し、無処置対照群、甲状腺摘除群 (Tx)、propylthiouracil 投与群 (PTU) に分けた。甲状腺摘除は、外科的に甲状腺および上皮小体を摘除し、術後 1% CaCl₂ を飲料水として投与した。PTU は 100mg/kg/day を経口投与し、それぞれ7日目に実験に供した。CPZ は、10mg/kg 腹腔内投与、体温は thermister を用い、直腸温を計測、経時的採血は尾静脈より行なつた。結果：CPZ 投与後体温変動は、Tx・PTU 群ともに初期反応は対照に比し遅れてみられるが、30分後 - 2.5°C、60分後 - 3°C、120分後 - 3.2°C で回復傾向がみられなかつた。Tx+T₂ 投与群では、体温下降の軽減がみられた。血糖値は、体温変動とは逆に上昇し、対照群では30分後に最大値を示し、以後持続するが、Tx および PTU 群では120分まで持続的に上昇した。Tx+T₂ 群は対照群に近付く傾向を示した。血清 Ca 値は CPZ 投与後30分に peak を示す変動であるが、対照に比し PTU 群では高値、Tx 群では低値であつた。なお、これらの機序について報告を加える。

3. 腓腹神経に発生した Entrapment neuropathy の1症例

(整形外科)

○仙誉 典子・飯田 裕・増淵 正昭・
白須 敬夫・森崎 直木

われわれは *N. suralis* の知覚支配領域である足背外側部に疼痛および知覚異常(主として *Hypästhesie*)を認め、かつこの神経の走行部に圧痛を認めた症例を得たので報告する。

症例26歳、看護婦、約4カ月前より上記の症状が出現してきた。足関節を膝関節伸展位で背屈させると痛みのため背屈できず、膝関節を屈曲位にすると背屈が可能であった。最も強い疼痛が誘発されるのは *Bragard* の test を行なつた場合であった。*Tinel's sign* のある部を0.5%キシロカイン0.5ccでblockするとただちに足関節が背屈可能となつた。*N. suralis* の分枝が癰痕でentrappedされ、このため足関節背屈時強いtensionが加わつて疼痛が誘発されたものと考えられる。解剖学的な走行からしてこの部位の *Entrapmentneuropathy* は、詳細にみれば以外と多いのではないかと思われる。

4. 当科における疥癬

(皮膚科) 前田 健

疥癬は戦後の流行以来、衛生状態の改善などとともに減少し十数年間は希な疾患となつていたが、近年数量的に増加の傾向にあり、当科においても多数の疥癬患者を経験した。昭和51年1月より本年4月15日までに当科において節足動物性皮膚炎と診断された患者は223名、そのうちで疥癬は54名である。54名中男性35名、女性19名で、男性に多い。また32名は虫体虫卵のいずれかが証明されているが、22名は証明不可能であつた。感染経路としては、性交する同居人からが最も多く、次いで友人、保育園内での感染、入院時の病棟での感染もあつた。しかし感染機会も不明が15名あつた。季節的変動を見ると、3月と10月に多く、どちらかというとも夏季減少傾向がある。臨床的に本疾患は角質増殖型、丘疹落屑型、結節型に分けられるが、一般に丘疹落屑型が多く、疥癬トンネルを認めるのが特徴とされている。54名のほとんどが丘疹落屑型であり、17名に疥癬トンネルを認めた。症例1と2は家族6人に感染した例である。症例2は2カ月と2歳の2人の子供にまで感染している。症例3は家族3人の例、症例4は23歳の男性に初発し、次いで同棲者、そしてその家族へ波及し、友人、その同棲者と計6人に感染した例。症例5は同棲中の2人である。本疾患の治療はオイラックスがよい。

5. 左横隔膜弛緩症による胃軸捻転、胃潰瘍の1手術例

(消化器病センター)

○平山 芳文・小林誠一郎・鈴木 茂・
高崎 健・武藤 晴臣・菊地 友允・
長岡 巍・喜多村陽一・中村 能史

(成人医学センター) 本間 康正

最近、われわれは、左肺上葉切除術および左横隔膜神経切除術施行15年後、左横隔膜弛緩症による胃軸捻転に胃潰瘍を合併した症例の胃切除術による治療例を経験した。なお、この症例は、術後重篤な肺合併症も併発し、この治療に難渋した。

術前の胸部単純写真では、左横隔膜挙上が著しく、肺機能検査においては、肺活量、二段肺活量の低下はあつたが、1秒率はあまり低下していなかつた。また、%VCは52%で、外科的適応の下界は、40%とされているので、手術は可能と判断し、施行した。

胃軸捻転は、その発症素因として、横隔膜弛緩、胃下垂、幽門十二指腸起始部の高度可動性、横隔膜ヘルニア、その他が考えられている。その症状は、急性型と慢性型に分類され、本症例のような慢性型で多い主訴は、心窩部鈍痛、胃部膨満感、便秘、嘔吐等の胃の不定症状で、比較的特有と考えられるのは、症状が食後に増悪することである。合併症としては、十二指腸潰瘍、胆石、胃潰瘍、肺炎、心不全、横行結腸軸捻転、その他の報告がある。慢性型でも、症状の強い場合、軸捻の原因となる疾患のある場合は、手術適応となる。慢性型の手術として、胃整腹術のみの術式は、ほとんど行なわれず、胃固定術、胃切除術が多い。本症例は、術後換気不全、喀痰の貯留、無気肺、肺炎等の肺合併症を併発し、その治療にバードによる補助呼吸等を施行し、全治させた。肺血流スキニングで、肺の機能を有さない部分が認められ、そこに喀痰の貯留が起つてしまつた事に原因が考えられる。

第16回吉岡研究奨励金授与式

昭和52年度受賞者

(内科) 前田美智子

(第二病院皮膚科) 平野 京子

昭和51年度受賞者の研究発表

微小電極法によるウグイ網膜内ニューロンの同定

(第一生理) 橋本 葉子